

平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究状況報告書

ふりがな（ローマ字）		KAMIMURA TOSHIO					
①研究代表者氏名		上村 俊雄		②所属研究機関・部局・職 鹿児島国際大学・国際文化学部・教授			
③研究課題名	和文	先史・古代社会の遠隔地交渉に関する人類史的総合研究					
	英文	Comprehensive research of human history concerning long-distance interactions in prehistoric and ancient societies					
④研究経費		平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	総合計
17年度以降は内約額 金額単位：千円		10,700	39,000	9,500	7,900	7,400	74,500
⑤研究組織（研究代表者及び研究分担者）							
氏名	所属研究機関・部局・職	現在の専門	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）				
上村 俊雄	鹿児島国際大学・国際文化学部・教授	考古学	研究統括、日本列島と周辺地域の遠隔地交渉関係資料収集、南西諸島外来系遺物の研究				
中園 聡	鹿児島国際大学・国際文化学部・教授	考古学・文化財科学	アジア・太平洋地域の遠隔地交渉関係資料の収集、蛍光X分析、発掘調査				
大西 智和	鹿児島国際大学・国際文化学部・助教授	考古学	古墳時代以降の遠隔地交渉関係資料の収集・検討、データの総合的整理・管理				
松本 直子	岡山大学・大学院文化科学研究科・助教授	考古学	ヨーロッパおよび縄文時代の遠隔地交渉関係資料の収集・研究、発掘調査				
三辻 利一	奈良教育大学・名誉教授	分析化学（考古科学）	日本及び周辺地域出土土器の蛍光X線分析の実施、分析データの整理・検討				
⑥当初の研究目的（交付申請書に記載した研究目的を簡潔に記入してください。）							
<p>本研究は先史・古代の遠隔地間交渉の実態および社会的役割・メカニズム等について解明するとともに、その人類社会における意義について考察を及ぼすものである。</p> <p>1) 「海」と「遠隔地交渉」を鍵とする新たな研究分野を開拓し、 2) 縄文時代後晩期社会及び弥生社会などを新視点から再検討し、社会の階層化・複雑化の実態を明らかにし、 3) ヨーロッパ、アジア・太平洋地域等の考古学的・歴史学的・人類学的諸研究と比較しながら、 4) 土器の観察と胎土分析などの文化財科学的方法や最新・最善の調査法を積極的に導入した研究から、 5) 遠隔地交渉が社会の発展にどのような役割を果たしたかを実証的に解明する。</p> <p>以上を通じて遠隔地交渉から社会の発展を説明し、長期にわたる日本文化の醸成の特質について、既研究にはなかった新たな視点を提示する。さらに遠隔地交渉の役割に関する高次の人類史的理論の構築に寄与する。</p>							

⑦これまでの研究経過（研究の進捗状況について、必要に応じて図表等を用いながら、具体的に記入してください。）

本研究テーマを解明するために、①文献および資料収集、②発掘調査、③蛍光 X 線分析装置等を用いた分析の 3 つの柱でデータを集積し、④調査・分析結果にもとづく考察および理論化と研究成果の公表を行っている。

①日本列島各地の先史～古代の遠隔地交渉の事例を収集した。また、ブリテン島をはじめヨーロッパ、太平洋地域などの関連する考古、歴史、民族誌的ケーススタディやデータを収集した。資料の対象は、移動・移動の可能性のある土器や石器などの遺物、それに加えて遺構、交易の行為等を含んでおり、物の移動だけでなく、情報の移動を含む広範なものである。とくに重点を置いたのが、弥生時代から古墳時代にかけてのゴホウラやイモガイ等の南海産貝製品、系譜が朝鮮半島に求められ列島の広域に移動する須恵器、縄文時代の翡翠、ヨーロッパ新石器時代のウミギクガイ、翡翠等に関する諸資料である。収集した資料、文献やデータは、データベースに収め、整理・検討中である。

②平成 16 年 8～9 月に長崎県五島列島にある宇久松原遺跡で発掘調査を実施した。本遺跡は弥生時代早期から中期の埋葬遺跡で、過去に支石墓、石棺墓、甕棺墓などが検出され人骨も多く出土するなど、考古学界・人類学界で著名な学術的価値の高い遺跡である。この調査で前期～中期前半の石棺墓 4 基と甕棺・壺棺墓 5 基を検出した。砂丘遺跡であるため墓壇の検出は絶望的とされてきたが、慎重かつ詳細な調査の結果、墓壇の検出はもとより、石棺の蓋を外した二次的埋葬（再葬・改葬）の痕跡の検出に成功したのは大きな成果といえる。墓壇の切り合い関係も把握できた。これにより、墓の構造や構築法、埋葬行為の解明に大きな手がかりが得られた。出土した人骨も二次的埋葬を示すものがあり、整合性がある。SK030 甕棺墓の内部には、成人女性と乳幼児の人骨、腕輪とみられる残欠 1 点がみとめられた。形質はいわゆる西北九州弥生人であり、縄文的な形質を残している。また、風習的抜歯も認められた。本遺跡で発見された大陸系管玉や腕輪等は海を越えた交渉を示す資料であり、土器もその疑いがある。また、弥生時代後期ごろとみられる SK008 石棺墓からは、ガラス製小玉が約 350 個出土した。成果の概要が明らかになった時点で記者発表を行うとともに、一般市民を対象に現地説明会を開催した。成人女性と乳幼児の 2 体分を埋葬した SK030 甕棺墓は、人骨の遺存が良好であり本地域の埋葬風習を解明する具体的資料として第一級の資料であることに鑑み、遺構ごと切り取って持ち帰り、人類学者の協力を得て緻密な調査を続けている。他の遺物・資料も鹿児島国際大学考古学実験室において整理作業および検討を進めている。同時に出土土器の多くについて胎土分析を実施するための選別を行っている。

③本研究で重要な役割を果たす完全自動式蛍光 X 線分析装置とその関連機器を設置した。平成 15 年度に設置のための綿密な計画を行い、設置準備を整えた。平成 16 年度に設置し、標準試料による検量線の作成、他の装置との比較や既測定試料の再測定を行うなどして調整を行った後、南西諸島・西北九州・北部九州・南部九州などの各地・各時代の試料の分析に着手した。従来、本法では地域差を表す K,Ca,Rb,Sr に Fe,Na を加えた 6 元素を測定してきたが、縄文土器・弥生土器などの低火度焼成の土器も測定するため、新たに Mg,Ti も加えることとした。精力的に試料および分析データの蓄積を継続しており、一部のデータは論文として公表した。資料所蔵機関への試料の提供依頼も行いつつある。

その他、偏光顕微鏡等を設置し、土器表面の観察や、胎土中に含まれる鉱物の分析をすることによって、外来土器、在土器の判別のための基礎的データを収集した。また、色差計を用い、土器の色調を測定した。このようにして、従来の伝統的な考古学的観察だけでは知りえない情報を得るべく努力している。今後もしっそう計画的に綿密に行う予定である。

④遠隔地交渉に関する個々の事例や理論面について議論を行い、概念の整備、既存の研究の問題点の抽出を行った。認知考古学の理論面の整備に重点を置いたため、一見、遠隔地交渉とは関係が薄いように見えようが、今後結実することになる。進化論というグランドセオリーからの広範な議論や認知科学的成果から検討も行き、遠隔地交渉の普遍性とその人類史上の役割について認識を深めた。人類と社会・文化の共進化の中での遠隔地交渉の役割とその変化について、地理的コンテクストを超えた共通性の存在が読み取れること、情報伝達・移動に関して理論的に著しい発展の可能性があることなどが研究分担者間で共有できた。これらの議論に基づく理解は、本研究の遂行上、重要な基盤となるはずであり、研究期間終了時までには遠隔地交渉に関する人類史的一般理論の構築が可能であるとの見通しをもつに至っている。

なお、以上の成果の一部は論文や学会発表等で公表しつつある。平成 15 年度、16 年度の 2 回にわたり成果発表のためのシンポジウムを開催した。平成 15 年度は人類史研究会との共催で「公開講演会」として講演とシンポジウム形式での討論を行い、平成 16 年度は「研究成果講演会 ヒト・モノ・情報の移動の考古学」として、各研究者の講演と研究協力者を含めた発表を行った。既に本研究についてのホームページを公開し、研究者のみならず一般への普及にも努めている。

⑧特記事項 (これまでの研究において得られた、独創性・新規性を格段に発展させる結果あるいは可能性、新たな知見、学問的・学術的なインパクト等特記すべき事項があれば記入してください。)

本研究において、蛍光 X 線分析による胎土分析等、文化財科学・考古科学的分析を行うことは、重要かつ研究上の特質となる部分である。併せて、その分析・研究を考古学者が行うことも特筆すべき意義をもつ。この胎土分析の具体的方法は、研究分担者の三辻によって開発されたものであり、列島規模での須恵器の産地推定を実現するなど、世界的にみても稀有なデータの蓄積と成果が得られている。この研究を将来継承する研究者がいなくなることは我が国の学術上、大きな損失であると危惧されていたが、本研究によりその実質的な継承が可能になった。本研究に当たって分析装置を導入し、三辻の蓄積した試料約 5 万点の寄贈を受け、今後、本法による胎土分析の日本における中核としての役割を果たすことを自認している。既に分析を開始しており、型式学的検討に頼るしかなく長年の懸案とされてきた沖縄諸島出土の在地土器と弥生土器との胎土の比較がはじめて実施できた。また、従来、壱岐原の辻遺跡などでは土器の外見的特徴から北部九州からの搬入が常態だったとする説もあったが、本研究による胎土分析からも、壱岐と北部九州との間の形態の判別分析からも、搬入説を否定し在地製作を示唆する結果が得られている。こうした結果は土器の地域間比較の際に外見上の類似度だけでなく胎土等の情報の利用や統計解析を用いた比較が非常に重要であることを如実に語っており、方法論上、従来の考古学的議論の危うさに警鐘を鳴らすとともに、考古科学的分析を総合した検討が必要であることを内外に明示することになる。考古学の方法論を大きく変えるインパクトとなると期待される。

五島列島周辺の西北九州は、弥生時代における特殊な地域であるといえる。特異な埋葬風習・風習的抜歯の残存・縄文的形質の残存・環濠集落の未発達などがある一方で、北部九州と薩摩半島ないし南西諸島との遠隔地交渉の仲介者としての役割を果たしたと考えているが、本研究での諸検討からやはりその可能性が大であることを研究者間で理解するに至っている。中園は弥生時代成立期における西北九州集団の先進性とその後の後進性を「構造維持志向型異文化導入モデル」を立てて説明しているが、むしろ、弥生時代のあり方を「取り残された」と解釈するより、遠隔地交渉のために「他集団との差異化を図った」という新しいモデルが成立する見通しをもっている。集団の異質性を強化するほうが相互に経済的・象徴的にメリットがあることも一因であろう。また、土器型式や胎土の予備的検討からは搬入品が多く含まれる可能性が出てきた。従来中園・三辻らは胎土分析で弥生時代は集落単位で土器生産が行われたとするモデルを立てているが、交易の仲介者としての西北九州は土器の搬入が常態であった可能性があるのである。今後の胎土分析等でそれが確認され、弥生時代における土器の生産・流通が一様でなく、地域によって異なるものであったとすれば、新事実となる。普通は異文化間のインタラクションによって同質性が高まると想定されようが、遠隔地交渉がかえって文化・社会システムや土器の生産・流通において差異を生み出す・強調することが考えられる。この新しい知見を統合することにより、遠隔地交渉と社会的階層化やエスニシティーの生成との関わりをより適切に理解することができるであろう。このように、新たな諸モデルを構築しつつあり、実証・検証していく予定である。従来漠然としていた遠隔地交渉の諸パターンとその機能について、より具体化、明確化することができると確信する。

発掘調査によって、困難とされていた墓壇の検出ができただけでなく石棺の蓋を外した二次的埋葬（再葬・改葬）の痕跡の検出に成功し、人骨の状況との対応がとれたことも成果である。弥生時代の石棺で二次的埋葬を土層から証明したのは、本例が初と思われる。これによって北部九州等と異なる埋葬行為の存在を実証的に復元できる可能性が大であり、今後の石棺調査の新項目となる。

本研究は、物の移動だけでなく、人の移動・情報の移動を含めた、集団間のインタラクションの総合的な研究でもある。認知考古学的考察は本研究の特徴であり、ヒトの生得的認知特性、物質文化のカテゴリー化、物質文化を含む情報の意識的・無意識的な取捨選択、社会戦略としての「意図」、異文化・異世界に対する知識・理解などの側面も重視している。本研究の一部として行った土器の分析から、集団によって物質文化のカテゴリー化に差があることや、カテゴリー構造の通時的变化もみられることが想定されるに至っている。過去の物質文化のカテゴリー化は、認知科学一般にも寄与できる重要課題と言える。考古学においても新たな研究領域となる可能性が高い。そのような発展性も本研究はもっている。

ヨーロッパ新石器時代の中での変化、縄文—弥生変革期、弥生時代前半と後半の間、弥生時代後半と古墳時代の間での変化など、遠隔地交渉の質的变化が明らかになってきた。遠隔地交渉を通じた縄文時代後半期の集団間関係の変化が弥生時代の開始につながるというモデルや、弥生時代中期後半には西北九州で多くの集落が途絶することは貝輪交易ルートの変化と関係することなど、遠隔地交渉をキーワードとした集団のダイナミクスについてモデルを立てることができた。こうした諸モデルは研究期間内に必ずや検証できるものと確信している。遠隔地交渉の役割の解明と一般理論への貢献によって、遠隔地交渉が人類史を語る上で重要なキーワードとなることが認知されるという見通しをもっている。

なお本研究の直接の目的ではないが、研究に協力することで考古科学や考古学の理論への理解を深めることで新たな研究を開拓する学生も増えつつあり、学界の将来に有望といえる効果もあがっている。

⑨研究成果の発表状況 (この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文(掲載が確定しているものを含む。)の全著者名、論文名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦)、及び国際会議、学会等における発表状況について記入してください。なお、代表的な論文3件に○を、また研究代表者に下線を付してください。)

研究成果講演会

平成15年度 公開講演会、3月20・21日、於鹿児島国際大学

上村俊雄：趣旨説明

三辻利一：何故、陶邑産須恵器は全国に伝播したか

松本直子：先史時代における遠隔地交渉の意義—ヨーロッパの新石器時代を例として—

中園聡：弥生時代の遠隔地交渉—中国・朝鮮半島・倭・南西諸島—

*講演後、代表者を含むメンバー全員による公開討論会を行った。

平成16年度 研究成果講演会、3月21日、於鹿児島国際大学

講演

上村俊雄：五島列島の支石墓と南九州の地下式板石積石室墓との関係について

三辻利一：土器の蛍光X線分析

松本直子：新石器時代の遠隔地交渉—ヨーロッパを中心に—

大西智和：地下式横穴墓にみる遠隔地交渉

中園聡・松本直子：長崎県宇久松原遺跡の発掘調査速報

研究分担者および研究協力者による関連研究ポスターセッション

鐘ヶ江賢二：赤い土器は海を越えたか?—壱岐原の辻遺跡と糸島の胎土分析から—

川宿田好見：遠隔地交渉研究に土器の製作技法は役立つか

大濱春代：考古学における地域と集団の対応関係—甕棺の分析を用いて—

黒木梨絵：型式と人は一致するか—土器のカテゴリ—構造の分析から—

中園聡・三辻利一：鹿児島国際大学における蛍光X線分析装置の設置

*講演およびポスターセッション終了後、メンバー全員による公開討論を行った。

論文・著書

上村俊雄「隼人の世界」『薩摩と出水街道』(街道の日本歴史 54)、pp.40-47、総頁数 250 頁、吉川弘文館、2003

上村俊雄「沖縄の先史・古代—交流・交易—」鹿児島国際大学附置地域総合研究所・上村俊雄編『沖縄対外交流史』pp.1-72、総頁数 327 頁、日本経済評論社、2004

上村俊雄「屋久島における先史文化の様相」『古文化談叢』50・下：1-21、2004

○上村俊雄「南西諸島の旧石器文化」『地域総合研究』32(1)：27-49、2004

中園 聡『九州弥生文化の特質』九州大学出版会、総頁数660頁、2004(本研究の成果を一部含んでいる)

中園 聡『宇久松原遺跡調査概要』総頁数16頁、2005(長崎県教育委員会へ提出)

中園 聡・川宿田好見・黒木梨絵・三辻利一「アンチの上貝塚および周辺遺跡出土土器の蛍光 X 線分析」『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』本部町文化財調査報告第8集、pp.196-204、2005

中園 聡「蛍光X線分析による九州南部地域出土土器研究の進展」『地域総合研究』31(1)：107-122、2003

中園 聡「東北タイにおける土器製作関連の物質文化資料—タタキ板—」『地域総合研究』31(2)：119-125、2004

○中園 聡「土器の異文化間比較の方法と理論」『文化の多様性と比較考古学』、pp.281-290、考古学研究会、2004

中園 聡「認知考古学の守備範囲」『考古学ジャーナル』514：38-40、2004

中園 聡「溝遺構出土の弥生土器について」『寺山遺跡付図』鹿児島県川辺町教育委員会、pp.15-20、2004

中園 聡「東アジア的視座に立った弥生時代の再解釈—九州・南西諸島・朝鮮半島・中国—」『沖縄対外交流史』pp.73-121、総頁数327頁、日本経済評論社、2004

中園 聡「Ⅱ 九州弥生文化の展開と交流」森岡秀人・中園聡・設楽博己著、『先史日本を復元する4 稲作伝来』、pp.37-71、岩波書店、2005

中園 聡「弥生土器をめぐる認知考古学的解釈の試み」『心と形の考古学』、同成社、印刷中

大西智和「北部九州における須恵器の導入と展開—朝倉系須恵器を中心に—」『地域総合研究』31(1) : 25-35、2003

大西智和「デジタル化された考古資料の画像処理に関する研究—発掘調査記録写真を素材として—」『情報処理センター年報』10 : 41-51、2005

松本直子・中園聡・時津裕子編『認知考古学とは何か』、総頁数 262 頁、青木書店、2003 (本研究の成果を一部含む)

○松本直子「認知・身体・文化—心の普遍性と多様性についての試論—」『文化の多様性と比較考古学』 pp.353-360、考古学研究会、2004

松本直子「縄文イデオロギーの普遍性と特異性—土偶の性格を中心に—」『文化の多様性と 21 世紀の考古学』 pp.150-158 (英文 159-165)、考古学研究会、2004

松本直子「縄文のイデオロギーと物質文化」『心と形の考古学』、同成社、印刷中

三辻利一「古式須恵器の産地推定法」統計学の手法による古代、中世土器の産地問題に関する研究 (第 16 報)、『情報考古学』9(1) : 27-37、2003

三辻利一「山口県内の須恵器・中世陶器の蛍光 X 線分析」統計学の手法による古代、中世陶器の産地問題に関する研究 (第 17 報)、『情報考古学』9(2) : 24-38、2004

三辻利一、吉岡康暢、木立雅朗、望月精司「石川県内の窯跡および消費地遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析」統計学の手法による古代、中世陶器の産地問題に関する研究 (第 19 報)、『情報考古学』10(1) : 9-22、2004

三辻利一、藤原 哲、西尾克己、平野芳英、角田徳幸「島根県内の窯跡および消費地遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析」統計学の手法による古代、中世陶器の産地問題に関する研究 (第 20 報)、『情報考古学』、10(2) : 13-35、2005

学会、国際会議における発表

Toshio Kamimura: Archaeology of the Ryukyu Islands, Rethinking Oceania、於カナダ・ラバル大学、2003

中園 聡：弥生土器をめぐる認知考古学的解釈の試み、21世紀COE「心の文化・生態学的基盤」第3回一般公開ワークショップ「心と形の考古学—認知考古学の実践と課題—」、於北海道大学、2003

中園 聡：弥生時代の遠隔地交渉—中国・朝鮮半島・倭・南西諸島—、人類史研究会第15回大会、於鹿児島国際大学、2004

中園 聡・時津裕子：現代東北タイの土器製作に用いられるタタキ具の検討、人類史研究会第 15 回大会、於鹿児島国際大学、2004

中園 聡・時津裕子：現代東北タイにおける土器製作に関する総合的研究、日本考古学協会第 70 回総会、於鹿児島国際大学、2004

河越彩子・中園 聡：遺構出土傾向からみた土器の用途—主成分分析を用いて—、日本情報考古学会第 19 回大会、於帝塚山大学、2005

黒木梨絵・中園 聡：土器におけるカテゴリー構造の時間的変化—北部九州弥生時代前期甕形土器を用いた分析—、日本情報考古学会第 19 回大会、於帝塚山大学、2005

川宿田好見・中園 聡：多変量解析を用いた弥生土器の地域性—北部九州の須玖Ⅱ式土器を用いて—、日本情報考古学会第 19 回大会、於帝塚山大学、2005

大西智和：九州における円筒埴輪と須恵器の導入と展開、人類史研究会第 15 回大会、於鹿児島国際大学、2004

Tomokazu Onishi: An archaeological overview of Japan and southern Kyushu、於カナダ・プリンスエドワードアイランド大学、2004

Naoko Matsumoto : Theory, society and politics: intertwined factors influencing the practice of gender archaeology in Japan、World Archaeological Congress-5、於アメリカ合衆国・ワシントン、2003

松本直子：認知考古学は心の進化をどうとらえるか、日本心理学会第 67 回大会 公開シンポジウム 心の進化学と考古学（21 世紀 COE プログラム“心とことば-進化認知科学的展開”共催）、於東京大学、2003

松本直子：縄文のイデオロギーと物質文化、21 世紀 COE「心の文化・生態学的基盤」第 3 回一般公開ワークショップ「心と形の考古学—認知考古学の実践と課題—」、於北海道大学、2003

松本直子：認知考古学登場の経緯、21 世紀 COE「心の文化・生態学的基盤」第 3 回一般公開ワークショップ「心と形の考古学—認知考古学の実践と課題—」、於北海道大学、2003

松本直子：考古学における人間観と進化論、JST 異分野研究者交流フォーラム 進化生物学は人間観を変えるか？：人文社会系諸学と進化生物学との対話、於妙義グリーンホテル、2004

松本直子：先史時代における遠隔地交渉の意義について、人類史研究会第 15 回大会、於鹿児島国際大学、2004

Naoko Matsumoto：Figurines, circular settlements and the Jomon worldviews、アメリカ考古学会第 69 回大会（SAA）、於カナダ・モントリオール、2004

松本直子：縄文イデオロギーの普遍性と特異性—土偶の性格を中心に—、考古学研究会 50 周年記念国際シンポジウム『文化の多様性と 21 世紀の考古学』、於岡山大学、2004

松本直子：玉文化の動態にかかわる認知的・社会的要因について—縄文時代後晩期の九州を中心に—、中国玉文化玉学第四届学術研討会、於中華人民共和国・大連大学、2004

三辻利一：山口県内の窯跡、遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析、日本情報考古学会第 16 回大会、於統計数理研究所、2003

三辻利一・中地佐和子・網谷克彦・松葉竜司：製塩土器の産地推定の試み、日本文化財科学会第 20 回大会、於島根県民会館、2003

三辻利一：石川県内の窯跡出土須恵器、中世陶器の化学的特徴、日本情報考古学会第 17 回大会、於帝塚山大学、2004

三辻利一：陶邑周辺の窯跡出土古式須恵器、日本文化財科学会第 21 回大会、於立命館大学、2004

三辻利一：陶邑窯群とその周辺の窯跡出土須恵器・埴輪の科学的特徴、日本文化財科学会第 21 回大会、於立命館大学、2004

三辻利一：島根県内の窯跡、消費地遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析、日本情報考古学会第 18 回大会、於共立女子大学、2004

三辻利一：考古科学の最前線Ⅱ「天皇陵（今城塚古墳）を科学する」日本文化財科学会主催、於高槻市・於東京都、2004

三辻利一：X 線で探る古代のロマン—考古学のすすめ、「古代の土器に光をあてる—蛍光 X 線による須恵器の分析」、日本表面科学会関西支部主催第 6 回市民講座、於大阪市立大学、2005

三辻利一、三田敦司：吉良町の古墳出土埴輪、土師器、須恵器の蛍光 X 線分析、日本情報考古学会第 19 回大会、於帝塚山大学、2005

発掘調査現地説明会

長崎県宇久島の宇久松原遺跡において、10 月 2 日に、記者発表及び現地説明会を実施。新聞社・テレビ局 7 社が現地で取材。現地説明会には約 150 人が訪れた。